

CATHOLIC DIOCESE OF NAGOYA
2-6-35 AOI HIGASHI-KU
NAGOYA, 461-0004 JAPAN
TEL :81-52-935-2223
FAX :81-52-935-2254
EMAIL:curia@nagoya.catholic.jp



カトリック名古屋教区
461-0004 名古屋市東区葵 2-6-35
電話 : 052-935-2223
ファックス : 052-935-2254
Eメール : curia@nagoya.catholic.jp

2020年9月1日

教区の皆さま

「すべてのいのちを守るための月間」について

教区司教 松浦悟郎

＋主の平和

9月6日(日)は「被造物を大切に作る世界祈願日」になっています。日本の教会は、昨年の教皇フランシスコ訪日のメッセージに呼応して、毎年9月1日から10月4日(アシジの聖フランシスコの記念日)を「すべてのいのちを守る月間」と決めました。名古屋教区ではすでに平和旬間で同じテーマを掲げ、各地で取り組んできました。

教皇は今年、このテーマと深く関わる回勅『ラウダート・シ』の発表5周年を記念して、2020年5月24日から2021年5月24日までを「特別ラウダート・シ記念年間」と決めました。同回勅は創世記を引用し、密接に絡み合う根本的な三つのかかわり、すなわち「神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわりによって、人間の生が成り立っている」(66)とし、「いのちにかかわるこれらの三つのかかわりは、外面的にもわたしたちの内側でも、引き裂かれてしまいました。この断裂が罪」と指摘しています。

私たちは、単に環境問題という枠の中だけでなく、この3つの関りに目を向けながら、祈り、取り組むことができればと思います。

今、コロナ禍のただ中にあり、共同で行動することが難しい状況なので、下記のことを参考にして、一人一人が生活を見直し、出来ることを実行していきましょう。

1. 月間の最初の日曜日である9月6日(日)のミサの中で、すでに配布されているカード「すべてのいのちを守るためのキリスト者の祈り」を唱える。期間中、個人で、または共同体の中で機会を設けて共に祈る。
2. 「ともに暮らす家である地球」のために、生活の中で自分にできることを考え、一つでも実行していく。
3. 教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』や『いのちへのまなざし』(カトリック中央協議会)を読み、出来る範囲で分かち合い(小教区会報へ感想を投稿するなど工夫)もしてみる。

参考 : 『ラウダート・シ』について参考までに、抜粋メモを付けておきます。これは、まとめでもなく、私が読んで、目に留まった文を抜粋したもののほんの一部です。このような内容が書かれていることを知っていただき、実際に手に取って読むきっかけになれば幸いです。

祈りのうちに

教皇フランシスコ 回勅『ラウダート・シ』より抜粋メモ

1. ともに暮らす家に起きていること

- * 単なる「情報の蓄積や好奇心の満足ではなく、むしろ、痛みをもって気づくこと、世界に起きていることをあえて自分自身の個人的な苦しみとすること、そして、一人ひとりがそれについてなしうることを見付け出すことです」(19)
- * 具体的には、汚染と気候変動、水、生命多様性の喪失、生活の質の低下と社会の崩壊、地球規模の不平等、などが取り上げられる。
- * 「こうした問題は使い捨て文化と密接につながっており、……排除された人々が悪影響を被るのです」(22)
→取り組みがあっても、「利害や消費主義」や「自己満足と呑気な無責任さを助長する、見せかけの、表面的なエコロジーが広がりつつある」(59)のは、「現在のライフスタイルと、生産および消費のモデルとを保つためのものです」

2. 創造の福音

- * 創世記では、密接に絡み合う根本的な三つのかかわり、「神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわりによって、人間の生が成り立っていることを示唆」(66)、「いのちにかかわるこれらの三つのかかわりは、外面的にもわたしたちの内側でも、引き裂かれてしまいました。この断裂が罪」→この罪によって自然への「統治の任にゆがみが生じた」。それは同時に「人間を恣意的な支配に服する単なる客体とみなす」ことになる。(82)
- * 「宇宙は、究極的に神の充満に達するように定められており」(83)、「すべての被造物はわたしたちとともに前進し、また、わたしたちを通して、共通の到達点である神へと向かっている」
- * 「すべての生き物を同じレベルに置くのではなく、また人間からその独自の価値とそれに伴う重大な責任を奪うことでもありません」(90)。
- * 「仲間である人間に対する優しさや共感や配慮が心に欠けているならば、人間以外の自然との親しい交わりは本物ではありえません」(91)「地上の被造物仲間に対する無関心や残虐行為は…他の人間への接し方に影響を及ぼすことになるのです。」(92)

3. その他

- * 技術躍進 → 「それらを利用する経済力のある人々に、人類全体と全世界に及ぶ強大な支配権を与えてきた」(102)
- * 「人間の有する根本的なかかわりのすべてをいやすことなく、自然や環境とのかかわりをいやしているふりはできません」(119)
- * 「人間が自分自身を中心に据えるとき、人間は刹那的な利便性を何よりも優先し、他のすべてのものは相対的なものになります」(122)＝実践的相対主義→「使い捨て」の論理を生む。
- * 環境とは、「自然と、その中で営まれている社会とのかかわりのこと」(139)→「わたしたちは、環境危機と社会危機という別個の二つの危機にはではなく、むしろ、社会的でも環境的でもある一つの複雑な危機に直面している」。一つ一つの有機体は、神の被造物として、それ自体善なるものでありながら、調和のとれた存在。
- * 「エコロジーとは生命体とその生育環境とのかかわりの研究のこと」(138)、すべてがつながっている → 貧しい人々のための優先的選択を認めるように(158)
- * 「地球は故郷であり、人類はともに暮らす家に住む一つの民」→世界規模の合意が不可欠(164)
- * 政治は経済に服従してはならず、経済は効率主導主義パラダイムに身をゆだねてはなりません。(189)
- * 主日の意味→「わたしたちが神との、自分自身との、他者との、世界とのかかわりを修復するための日です。主日は、復活の日、新しい創造の『第一の日』、「この日はまた、『神のもとにおける人間の永遠の休息』を告げる日でもあります」(237)